

2021年7月31日

機械理工学専攻・マイクロエンジニアリング専攻・航空宇宙工学専攻

2022年度大学院修士課程入学試験問題

**数学**

(180点)

9:30～11:30

問題数 2問

**注意事項**

1. 問題冊子は試験監督者の指示があるまで開かないこと。
2. 問題2問すべてに解答せよ。
3. 万一落丁を見つけた場合には、手を挙げてすみやかに試験監督者に申し出ること。

1.

デカルト座標系  $xyz$  において、任意の実ベクトル  $\boldsymbol{v}$  を、原点を通り向きが単位ベクトル  $\boldsymbol{n}$  で表される軸のまわりに角度  $\theta$  回転したベクトルを  $\boldsymbol{v}'$  とする。  $\theta$  の符号は、  $\boldsymbol{n}$  の向きに進む右ねじが回転する向きを正とする。以下の問いに答えよ。

1 - 1  $\boldsymbol{v}$  と  $\boldsymbol{n}$  のなす角を  $\alpha$  とするとき、  $\cos \alpha$  を  $\boldsymbol{v}$ ,  $\boldsymbol{n}$  を用いて表せ。

1 - 2  $\boldsymbol{v}$  を  $\boldsymbol{n}$  に平行なベクトル  $\boldsymbol{v}_{\parallel}$  及び垂直なベクトル  $\boldsymbol{v}_{\perp}$  に分けて  $\boldsymbol{v} = \boldsymbol{v}_{\parallel} + \boldsymbol{v}_{\perp}$  と表し、ベクトル  $\boldsymbol{w}$  を  $\boldsymbol{n}$  と  $\boldsymbol{v}_{\perp}$  の外積  $\boldsymbol{w} = \boldsymbol{n} \times \boldsymbol{v}_{\perp}$  とする。  $\boldsymbol{v}_{\parallel}$ ,  $\boldsymbol{v}_{\perp}$ ,  $\boldsymbol{w}$  をそれぞれ  $\boldsymbol{v}$ ,  $\boldsymbol{n}$  を用いて表せ。

1 - 3  $\boldsymbol{v}'$  を  $\boldsymbol{v}_{\parallel}$ ,  $\boldsymbol{v}_{\perp}$ ,  $\boldsymbol{w}$ ,  $\theta$  を用いて表せ。

1 - 4  $\boldsymbol{n} = \frac{1}{\sqrt{2}} \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$  のとき、  $\boldsymbol{v}' = R_1(\theta)\boldsymbol{v}$  の関係を満たす行列  $R_1(\theta)$  を求めよ。

1 - 5  $k$  を自然数とするとき、前問の  $R_1(\theta)$  について、  $[R_1(\theta)]^k$  の行列式と逆行列を求めよ。

1 - 6  $\boldsymbol{v}' = R_2\boldsymbol{v}$  の関係を満たす行列  $R_2$  が以下の式で与えられるとき、  $\boldsymbol{n}$  及び  $\theta$  を求めよ。ただし、  $0 \leq \theta \leq \pi$  とする。

$$R_2 = \frac{1}{8} \begin{pmatrix} 5 & \sqrt{3} & 6 \\ \sqrt{3} & 7 & -2\sqrt{3} \\ -6 & 2\sqrt{3} & 4 \end{pmatrix}$$

2.

2-1

以下の問いに答えよ。ただし、 $i$ は虚数単位である。

- (1)  $x$ を実数、 $a$ 、 $R$ を正の実定数、 $z$ を複素数とする。図2-1に示した長方形の周囲を反時計まわりに一周する積分路 $C$ に沿って、複素積分

$$\oint_C e^{-z^2} dz \quad (2.1)$$

を考えることにより、

$$\int_{-\infty}^{\infty} e^{-x^2} \cos(ax) dx = \sqrt{\pi} e^{-a^2/4} \quad (2.2)$$

を示せ。ただし、必要であれば、次の積分公式を用いてもよい。

$$\int_{-\infty}^{\infty} e^{-x^2} dx = \sqrt{\pi} \quad (2.3)$$

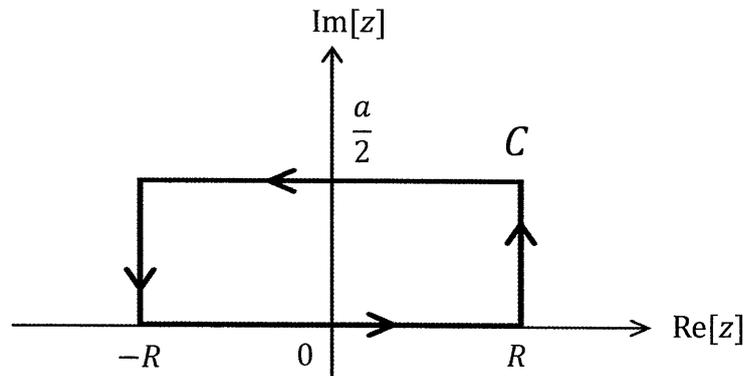


図2-1

- (2)  $x$ 、 $\omega$ を実数、 $\lambda$ を正の実定数とする。区分的に連続でなめらか、かつ絶対可積分な関数 $f(x)$ に対して、 $f(x)$ のフーリエ変換 $F(\omega) = \mathcal{F}[f(x)]$ 、 $F(\omega)$ のフーリエ逆変換 $f(x) = \mathcal{F}^{-1}[F(\omega)]$ をそれぞれ、

$$F(\omega) = \mathcal{F}[f(x)] = \int_{-\infty}^{\infty} f(x) e^{-i\omega x} dx \quad (2.4)$$

$$f(x) = \mathcal{F}^{-1}[F(\omega)] = \frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^{\infty} F(\omega) e^{i\omega x} d\omega \quad (2.5)$$

で定義する。関数 $p(x) = e^{-\lambda x^2}$ のフーリエ変換 $P(\omega)$ を求めよ。なお、必要であれば、問い2-1(1)の結果を用いてもよい。

(第2問 つぎのページにつづく)

2-2

実変数  $x, t$  ( $-\infty < x < \infty, t > 0$ ) の実数値関数  $u(x, t)$  が, 次の微分方程式, 初期条件を満たすものとする. ここで,  $g(x)$  は  $-\infty < x < \infty$  で定義される実数値関数である.

$$\frac{\partial u}{\partial t} = D \frac{\partial^2 u}{\partial x^2} \quad (D \text{ は正の実定数}) \quad (2.6)$$

$$\lim_{t \rightarrow +0} u(x, t) = g(x) \quad (2.7)$$

ただし,  $u(x, t), g(x)$  について, 以下の (i) - (iv) を仮定する.

(i)  $u(x, t), g(x)$  は, ともに問い 2-1 (2) において  $\mathcal{F}$  として定義した  $x$  に関するフーリエ変換 (以降, フーリエ変換  $\mathcal{F}$  と表記する) が可能で, それぞれのフーリエ変換が  $U(\omega, t), G(\omega)$  で表される.

(ii)  $\frac{\partial u}{\partial x}, \frac{\partial^2 u}{\partial x^2}$  は, ともにフーリエ変換  $\mathcal{F}$  が可能である.

(iii)  $u(x, t), \frac{\partial u}{\partial x}$  は, ともに  $x \rightarrow \pm\infty$  で 0 に収束する.

(iv) フーリエ変換  $\mathcal{F}$  に対して, 次の等式が成り立つ.

$$\mathcal{F} \left[ \frac{\partial u}{\partial t} \right] = \frac{\partial}{\partial t} (\mathcal{F}[u]) \quad (2.8)$$

$$\mathcal{F} \left[ \lim_{t \rightarrow +0} u \right] = \lim_{t \rightarrow +0} \mathcal{F}[u] \quad (2.9)$$

以下の問いに答えよ.

(1) 問い 2-1 の式 (2.4) を使って,

$$\mathcal{F} \left[ \frac{\partial u}{\partial x} \right], \quad \mathcal{F} \left[ \frac{\partial^2 u}{\partial x^2} \right]$$

をそれぞれ求めよ. ただし,  $\omega, U(\omega, t)$  を用いてもよい.

(2)  $U(\omega, t)$  を  $\omega, t, D, G(\omega)$  を用いて表せ.

(3)  $g(x) = e^{-\xi x^2}$  ( $\xi$  は正の実定数) のときに,  $u(x, t)$  ( $t > 0$ ) を求めよ. ただし, 必要であれば, 問い 2-1 の結果を用いてもよい.